

調査報告

第5次北サッカラ遺跡調査概報

河合 望*¹・吉村 作治*²・近藤 二郎*³・柏木 裕之*⁴
高橋 寿光*⁴・米山 由夏*⁵・石崎 野々花*⁶
馬場 悠男*⁷・坂上 和弘*⁸・サリーマ イクラム*⁹

A Preliminary Report on the Fifth Season of the Excavation at North Saqqara

Nozomu Kawai*¹, Sakuji Yoshimura*², Jiro Kondo*³, Hiroyuki Kashiwagi*⁴
Kazumitsu Takahashi*⁴, Yuka Yoneyama*⁵, Nonoka Ishizaki*⁶
Hisao Baba*⁷, Kazuhiro Sakaue*⁸ and Salima Ikram*⁹

Abstract

The Japanese-Egyptian mission to North Saqqara conducted the fifth season from July 29 till September 26, 2019. This project aims to search the location of the previously unknown New Kingdom cemeteries at North Saqqara and excavate them in order to understand the political and cultural history of Memphis during the New Kingdom. The excavation area is located on the slope of the eastern escarpment between the old Inspectorate building of the antiquities department and the old British mission's dig house. In this season, we continued excavation at the area where we found part of some structural remains in the last season. This paper reports the result of the fifth season of the project.

Our excavation revealed the oval-shaped circular structure made of pottery vessels and mud-bricks, which was partially uncovered in the last season. It seems to have functioned as the entrance of the vaulted structure at later phase of use. The excavation also revealed the vaulted structure which was found partially in the fourth season, covering the staircase made of limestone descending towards the rock-cut tomb. The vaulted structure measures 9m in length and 1.2m in width. At the end of the descending staircase, there is the entrance gate for the rock-cut tomb, measuring 1.64m in height and 91cm inside of the entrance door in width. On the top of the entrance gate, a stela showing the three deities bearing Greek inscriptions at the bottom was uncovered *in situ* in a niche hewn on the cliff of the limestone bedrock. On the both side of the descending staircase, we found two recumbent lion statues made

* 1 金沢大学新学術創成研究機構教授
* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授
* 3 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長
* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 5 鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程
* 6 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 /
日本学術振興会特別研究員
* 7 独立行政法人国立科学博物館名誉研究員
* 8 独立行政法人国立科学博物館人類研究部研究主幹
* 9 カイロ・アメリカン大学社会学エジプト学人類学科教授

* 1 Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University
* 2 President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University
* 3 Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University
* 4 Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University
* 5 Doctoral Student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University
* 6 Doctoral Student, Department of Archaeology, Waseda University / Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science
* 7 Researcher Emeritus, National Museum of Nature and Science, Tokyo
* 8 Senior Researcher, Department of Anthropology, National Museum of Nature and Science, Tokyo
* 9 Professor, Department of Sociology, Egyptology and Anthropology, American University in Cairo

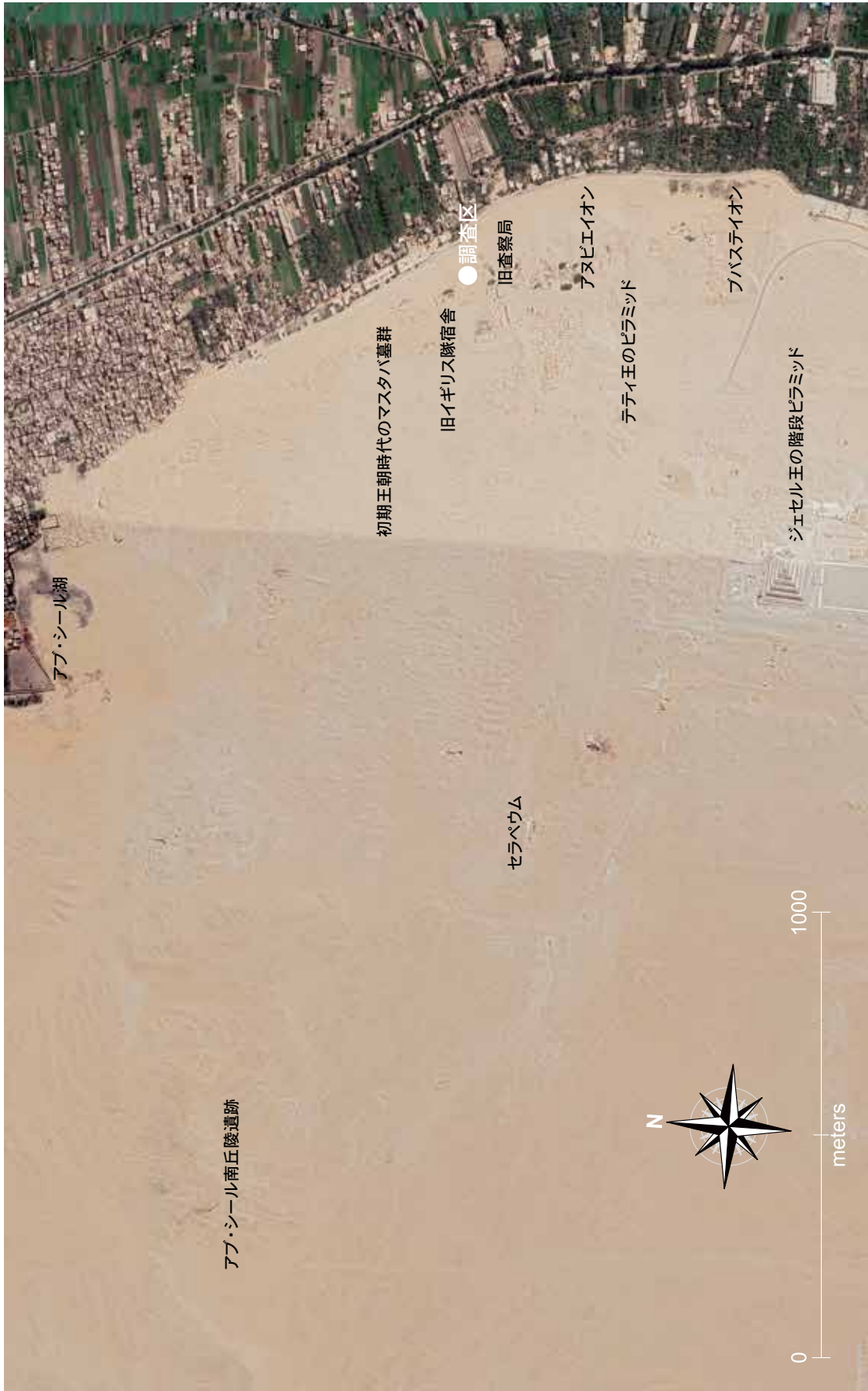


図1 北サッカラ地図
Fig.1 Map of north Saqqara

of limestone *in situ*. They face each other as if they are guarding the entrance gate. The rock-cut chamber behind the entrance gate measures 15m in length and 2.5m in width. There were a lot of remains of burials including mummified bodies and skeletons inside of the coffins as well as simple skeletons all over. Notably, we found a large terracotta statue of Isis-Aphrodite with an Harpocrates (Horus) near the painted entrance of one of the side rooms. Also, we found a stela decorated with the image of a woman named Demeteia and her dog with Greek Inscription fallen from original place into the inside of the coffin and removed it from the rock-cut chamber. It appears that the rock-cut chamber was a catacomb dating to the Roman Period around A.D.100. We plan to excavate inside of the catacomb in the next season.

1. はじめに

古代エジプト新王国時代の北の中心地であったメンフィスの墓地であるサッカラについては、これまで網羅的な調査が実施されてこなかった。サッカラにおいて新王国時代の墓を新たに発見、調査することにより、これまで南の中心地テーベに偏重してきた新王国時代史の再構築が期待される¹⁾。

このような問題意識のもとに、2015年度から科学研究費補助金基盤研究(B)(海外学術調査)「エジプト、サッカラにおける新王国時代の墓の調査研究」(研究代表者:河合 望(金沢大学)、課題番号:15H05163)の助成を受け、サッカラの新王国時代の墓をテーマとした調査研究を開始した。これまで踏査、測量、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の東側斜面(C地区と呼称、図1参照)²⁾に未発見の新王国時代の岩窟墓群が存在する可能性が高いとの結論に至った(河合他2017a, 2017b, 2018a)。これを受け、2017年の第3次調査および第4次調査において、C地区で発掘調査を実施したところ、岩窟墓の一部と考えられる石灰岩の壁や日干レンガの通廊が発見された(河合他2018b, 2020a)。

この成果を受け、第5次調査として、2019年7月29日から9月26日にかけて、同地区にて継続して発掘調査を行った³⁾。本稿では、第5次調査の概要について報告を行う。

2. 発掘調査

第5次調査では、第4次調査で設定したArea 1からArea 4までの発掘区に加え、更にArea 5を設定し、発掘調査を行った(図2)⁴⁾。

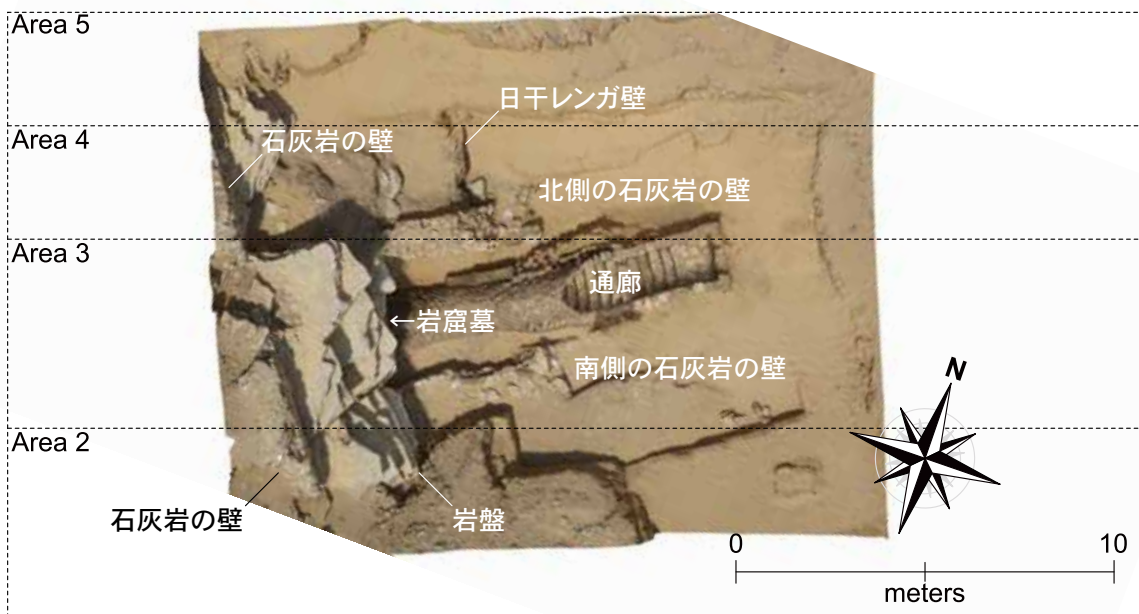


図2 発掘区(第5次調査終了時)
Fig.2 Map of the excavation site after the fifth season

発掘区の基本的な層位について、図3に示す。各層の内容については、以下の通りである。

1. 黄色砂層（日干レンガ含む）：約10～20cmの日干レンガ片、約5cmの礫を含む。西側から流れ込んできた過去の発掘調査の排土と考えられる。
2. タフラチップ混じり黄色細砂層：風成の黄色の細砂に約1～3cmのタフラチップが少量混じる。
3. 黄色細砂層：風成の砂層。ローマ支配期の遺物、埋葬を含む。

発掘調査を行ったところ、第4次調査において岩盤東側で発見されていた土器の集中は、その下にある通廊にアクセスするために築かれた土留めであることが確認された。また、この通廊は西側に下降し、岩盤に穿たれた岩窟墓（ローマ支配期のカタコンベ）に続いていることが明らかとなった。なお、今回発見された通廊と岩窟墓には、暫定的に「NST(North Saqqara Tomb)01」の名称を付けた。以下に、(1)岩盤東側、(2)岩窟墓(NST01)の2つに分け、更に(2)岩窟墓(NST01)については、①通廊、②岩窟墓に分けて、発掘調査の成果を報告する。

(1) 岩盤東側

第4次調査において、岩盤東側で発見された土器集中は、北側に続くことが確認されており、第5次調査では、続きとなる北側部分の発掘調査を行った。発掘を行ったところ、主にローマ支配期の土器、日干レンガ片、石灰岩片で構成される円環状の遺構が発見された（写真1）。第4次調査で出土した土器集中は、この土器の円環状の遺構の南側部分であることが確認された。

円環状の遺構の内部には、上から続く風成の黄色細砂が堆積しており、これを発掘したところ、日干レンガのヴォールト天井を持つ通廊に続くことが明らかとなった（写真2）。円環状の遺構は、堆積した砂にもたせかけるようにやや外に広がるように作られていることから（写真3）、通廊が作られた後、この通廊を（おそらく盗掘などのために）利用するため、砂の崩落を防ぐ目的で作られたと考えられる。なお、この通廊の本来の入口は更に東側に位置しており、また、後述する西側に位置する岩窟墓に続いている。

円環状の遺構のほぼ中央には、ローマ支配期のアンフォラ2個体が天地を逆にして、立てて置かれていた（写真4）。おそらく意図的にこのように置かれたものと考えられる。後述するように、通廊内部や岩窟墓入口においても、複数回の利用の痕跡が見られることから、このアンフォラもそうした利用に伴って置かれた可能性が考えられる。

岩盤東側の発掘調査では、第4次調査と同じく、砂上に簡易的に埋葬されたいわゆる単純埋葬が25体発見されている。埋葬は仰臥位伸展葬で、骨盤の上に両手を乗せている。頭位は、19体が南西、4体が北東、1体が北西、1体が西を向く。また、22体が成人で、3体が子供である。25体のうちの3体は、布が巻かれた状態で発見された（写真5,6）。また、金箔片が残る埋葬も見られた（写真5,6）⁵⁾。副葬品などを伴う例はなく、年代の決定は難しいが、層位などからローマ支配期からコプト時代の可能性が考えられる⁶⁾。

その他、第4次調査では日干レンガの通廊の南北から石灰岩の壁が一部発掘されたが、第5次調査の結果、これらの石灰岩の壁は、岩盤から東に延びる壁厚約1mの壁であったことが明らかとなった。ただし、壁が築かれた地業面を発見するには至らず、通廊との関係は不明である。

同じく、第4次調査でその一部が発見されていた岩盤上に築かれた石壁についても、今回の調査で北端を確認することができた。そして、石壁の上には日干レンガの壁が築かれ、そのまま北に延びる様子が確認された（写真7-9）。更に、この壁の下の位置からも日干レンガの壁が発見された。壁は、通廊の北側に築かれた石壁に南端が接し、ニッチ状の凹凸も確認された。こうしたニッチ状の壁面は、初期王朝時代から古王国時代のマスタバ墓で広く見られる様式で興味を惹く。第5次調査ではごく一部に留まっており、次回以降調査区を広げ、年代や周囲の遺構との関係性を探る計画である（写真7-9）。

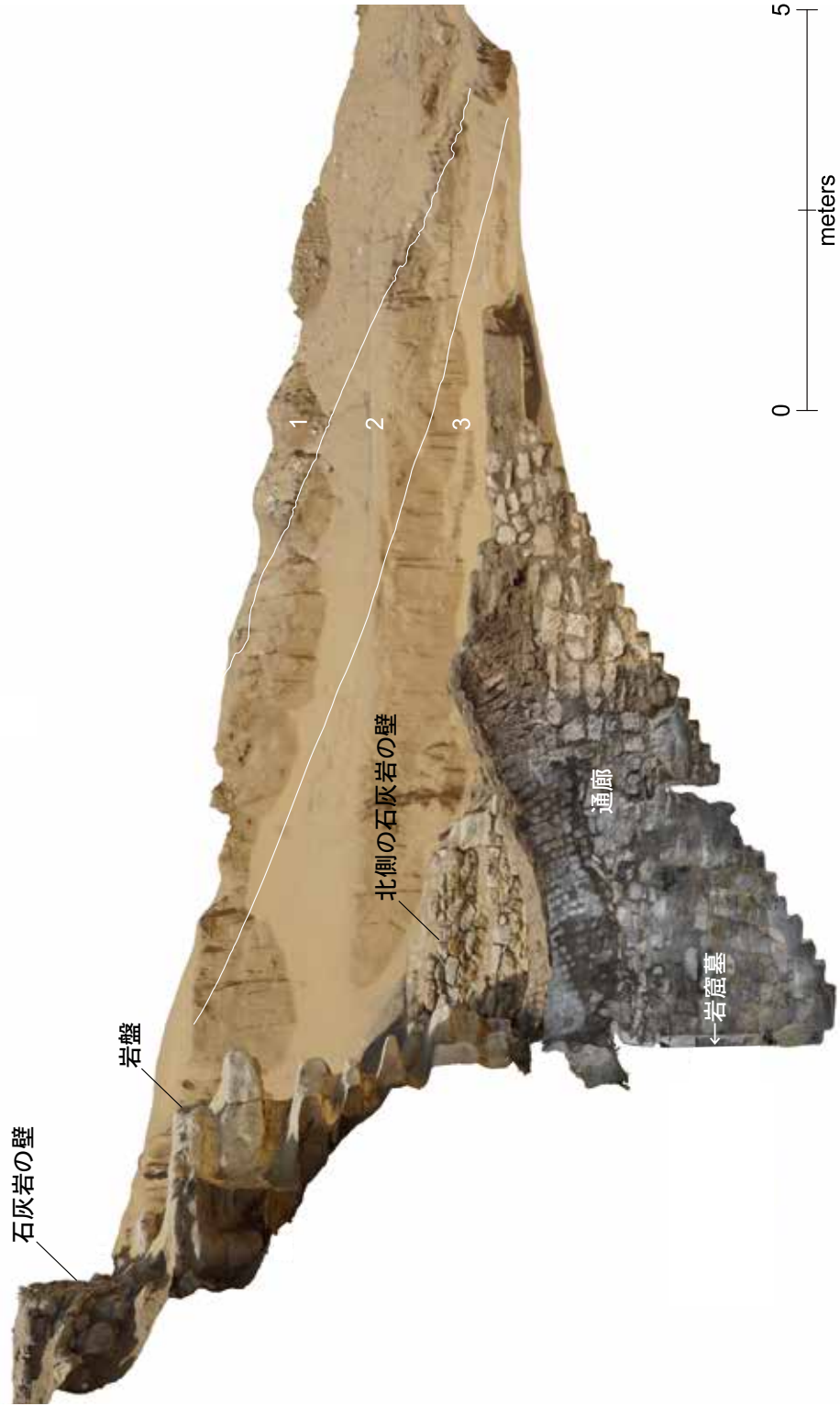


図3 発掘区北側セクション
Fig.3 The north stratigraphic profile of the excavation area



写真1 土器や日干レンガで作られた円環状の遺構
Pl.1 Oval-shaped circular structure made of pottery vessels and mud-bricks



写真2 通廊に続く円環状の遺構
Pl.2 Oval-shaped circular structure



写真3 円環状の遺構の断面図
Pl.3 Cross section of the oval-shaped circular structure

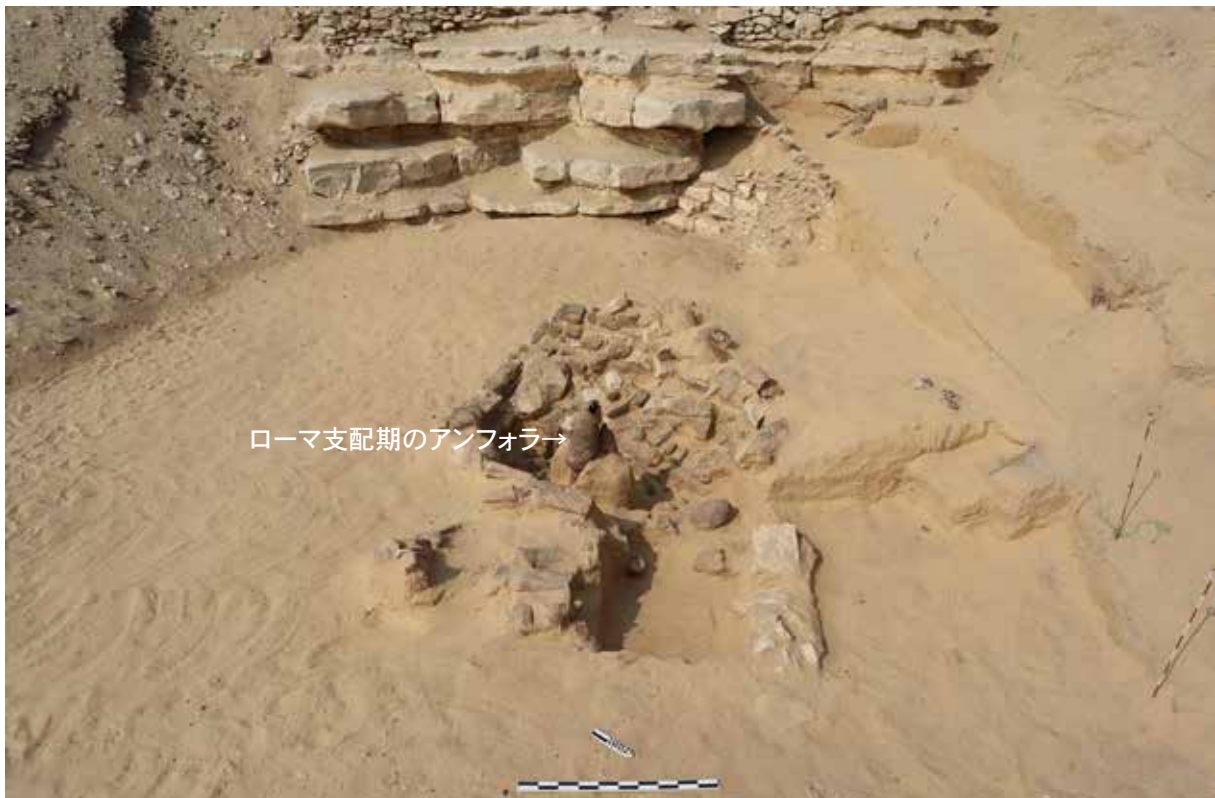


写真4 円環状の遺構中央のローマ支配期のアンフォラ
Pl.4 Roman amphorae from center of the oval-shaped circular structure



写真5 単純埋葬 (NS05-o00877)
Pl.5 Simple burial which was mummified and rapped with linen bandage



写真6 大人と子供の単純埋葬 (NS05-o00765, o00766)
Pl.6 Adult simple burial and child simple burial



写真7 発掘区第5次調査終了時（東より）

Pl.7 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the east



写真8 発掘区第5次調査終了時（北東より）

Pl.8 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the northeast



写真9 発掘区第5次調査終了時（南東より）

Pl.9 The excavated area and the vaulted structure at the end of the season, viewing from the southeast

(2) 岩窟墓 (NST01)

① 通廊

今回の調査によって、第4次調査で一部確認されていた日干レンガのヴォールト状の天井を持つ通廊は、後述する岩窟墓にアクセスするための通廊であることが明らかとなった（写真7-9）。通廊の幅は約1.2mであり、長さは約9mである。通廊は主に天井部分が日干レンガで作られており、側面が石材で作られている。通廊は、岩窟墓の入口から東側に上昇するように伸びており、床は石灰岩を敷いた階段となっている（写真10, 11）。通廊を覆うヴォールト天井も東に上昇するが、途中で角度が変化し、また用いられた日干レンガの大きさも異なっていた。改変の可能性が窺われるが、東側の天井は失われており、詳細は不明である（写真12）。通廊の東側は、両壁が内側に直角に曲がっており、通廊への入口のようにになっている（写真12）。

通廊が作られた年代について、直接的な証拠はないものの、通廊の上に堆積する砂中から単純埋葬（NS05-o00715, o00716）が出土すること（写真13）、別の単純埋葬（NS05-o00764）の頭蓋骨の上に通廊が作られていること（写真14）などから、単純埋葬が付近に埋葬され続ける一連の活動の中で、通廊も作られたと考えられる。また、通廊の石材で作られた側面壁が堆積する砂にもたせかける、石の階段が砂の上に作られていることなどから、付近に砂が堆積した後に、砂を一部どけて、この通廊が作られたと考えられる。



写真10 通廊内部（東より）
P.10 The staircase inside the vaulted structure,
viewing from the east



写真11 通廊内部（西より）
Pl.11 The staircase inside the vaulted structure,
viewing from the west



写真12 通廊東側の入口
Pl.12 The entrance of the vaulted structure



写真 13 通廊付近の単純埋葬 (NS05-o00715, o00716)
Pl.13 Simple burials found in the vicinity of the entrance of the vaulted structure



写真 14 単純埋葬 (NS05-o00764) の頭蓋骨の上に作られた通廊
Pl.14 A Simple burial which its skull was destroyed by the vaulted structure

通廊内部の堆積状況について、写真15に示す。各層の内容は以下のようになっている。

1. 黄色細砂層①：風成の黄色細砂の堆積。
2. 日干レンガ崩落層①：5～10cm程度の日干レンガ片が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の天井などの日干レンガが何らかの活動（層の上面から墓内部に由来する木棺片が出土したため、おそらく盗掘）の影響で、一部こぼれ落ちたと考えられる。
3. 黄色細砂層②：風成の黄色細砂の堆積。
4. 日干レンガ崩落層②：大小様々なサイズの日干レンガ、日干レンガ片が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の壁もしくは天井の崩落に由来すると考えられる。
5. 石灰岩崩落層：20～30cm程度の石灰岩が、風成の黄色細砂に混じる。通廊の壁の崩落に由来すると考えられる。

層位の観察から、石灰岩の壁と日干レンガのヴォールト天井が作られた後に⁷⁾、少なくとも一度は崩落し（第4層、第5層）⁸⁾、少し砂（第3層）が堆積する時間をおいてから、再度、通廊が利用されたと考えられる。というのも後述するように、砂が少し堆積した後に天井の東端のほぼ真下に封鎖壁が作られているからである。なお、この封鎖壁の更にも上にも同質の砂（第3層）が堆積していることから、層には明確には違いが見られないものの、第3層は上下に分けることができるかもしれない。封鎖壁の上に砂が堆積した後に、日干レンガの崩落や木棺片などが見られることから（第2層）、おそらく盗掘によってもう一度、通廊が利用され、その後、また砂（第1層）が堆積したと考えられる。



写真15 内部の堆積状況
Pl.15 The stratigraphy inside the vaulted structure

通廊内部には、2箇所に日干レンガの封鎖壁が作られている。一つは、天井の東端のほぼ真下であり、空積みで、通廊内部の第3層の途中に作られている（写真16）。もう一つは通廊内部中央付近にあり、こちらも空積みである（写真17）。なお、この封鎖壁の西側には、北側の石壁を支えるように日干レンガの構造物が築かれている（写真18）。石壁が内側に向かって歪み、崩落しそうな箇所に築かれていることから、古代における補強の可能性が考えられる。

②岩窟墓

通廊の西側の岩盤部分には、岩窟墓が作られている。岩窟墓の入口は、岩盤に薄い石灰岩の板を貼った造りをし、幅約91cm、高さ約1.64mであった（写真20）。石灰岩の板は、入口の両脇と上部のまぐさ（リントル）および天井に用いられ、まぐさの上部には凹面をしたコーニスとかまぼこ状のトラスが備えられた。石灰岩の表面は入念に整形されていたが、碑文などは刻まれていない。また通廊の両側壁は、この石灰岩の入口を一部覆い隠すように接続しており、両者の間には時期差があった可能性が高い。

コーニスの上には、ステラが岩盤に穿たれた窪みにはめ込まれた状態で発見された（写真19, 25）。ステラの前面には、内部に由来すると考えられるテラコッタ像（写真19, 28）、ランプ（図4, 写真19）、土器（図5.6, 7, 写真19, 35）などがある。層位の検討などから、これらの遺物はおそらく盗掘の際にここに置かれたものと考えられる。

岩窟墓の入口は少なくとも3種類の異なる封鎖壁で閉じられていた（写真20）。いずれも日干レンガの空積みで築かれ、上中下、それぞれの壁の間には砂が挟まっていた。複数回に渡る活動が窺われるが、その詳細については不明である。

入口前からは、南北で向かい合うように置かれた石灰岩製のライオンの横臥像が2体、古代に設置されたままの状態で発見された（写真21, 29, 30）。墓の入口を守るように置かれている。ライオンの横臥像の設置は、通廊が建てられた時期と同じであると考えられる。というのも、北側のライオンの横臥像は、前述した日干レンガの補強（写真18）に一部覆われており、通廊の壁の劣化に伴ってこのような補強がされたとするならば、ライオンの横臥像は通廊建設の初期から設置されていたと考えられる。

岩窟墓の内部は奥に長い一室で、幅は約2.5m、東西方向の奥行きは約15mと見積もられた（写真22）。第5次調査では内部の発掘は行わず、写真記録による現状の把握に努めた。内部には人骨と木棺が置かれ、一部は壁に穿たれた壁龕の中に納められていた。遺構の建造時期や性格などの最終的な結論は、次回以降の本格的な発掘調査を待つ必要があるが、現時点の見解としては、ローマ支配期前期に活動が営まれた集団地下墓地、いわゆるカタコンベを提示しておきたい。なお、納められた遺物の保安、保護にエジプト側から懸念が示され、協議の結果、ステラ（写真23, 26）、テラコッタ製像（写真24, 27）などを取り上げ、収蔵庫に移動した。



写真 16 通廊東側の日干レンガの封鎖壁
Pl.16 Mud-brick sealed wall on the east of the vaulted structure



写真 17 通廊中央の日干レンガの封鎖壁
Pl.17 Mud-brick sealed wall on the middle of
the vaulted structure



写真 18 石壁を支える古代に作られた
日干レンガの構造物
Pl.18 Ancient restorations by mud-brick wall
inside the vaulted structure



写真 19 岩窟墓入口上のメラネオスのステラ（原位置）およびテラコッタ像、ランプ、土器
Pl.19 Stela of Menelaus *in situ*, and terracotta figurines, lamps and pottery vessels above the entrance of the catacomb



写真 20 岩窟墓入口および封鎖壁
Pl.20 The entrance gate of the catacomb



写真21 原位置で発見された岩窟墓入口前のライオンの横臥像
Pl.21 Two recumbent lion statues found *in situ* in front of entrance gate



写真22 岩窟墓内部（東より）
Pl.22 The rock-cut tomb before excavation, viewing from the east



写真 23 岩窟墓内部のデメテリアのステラ
Pl.23 Stela of Demeteria inside the rock-cut tomb



写真 24 岩窟墓内部のイシス・アフロディーテ女神と
ハルポクラテス（ホルス）の彩色テラコッタ製像
Pl.24 Painted terracotta statue of Isis-Aphrodite with
an Harpocrates (Horus) inside the rock-cut tomb

3. 出土遺物

ここでは、今期の調査において出土した主な遺物について報告する。

(1) ステラ

①メラネオスのステラ（写真 25）

NS05-o00820、岩窟墓入口上、幅 40.4cm、高さ 50.5cm、厚さ 9cm。

このステラは、前述のとおり、岩窟墓の入口の上に穿たれたニッチに原位置で据え置かれていたものである（写真 19, 25）。上部が半円形のステラである。部分的に彩色が残存している。最上部に天空のサイン pt があり、その下に有翼日輪が表され、その下に右からアヌビス神、トト神、ソカル神が表現されている。いずれの神々もウアス杖を手にしてしている。伝統的な古代エジプトの神々の姿であるが、アヌビス神とトト神のプロポーシオンは、プトレマイオス朝以降の人物像の特徴である膨らんだ腹部の特徴を示している（Robins 1994: 257）。

ステラの最下部にはギリシア文字が刻まれているが、一段低く削られた場所にあることから、ステラを再利用した可能性が考えられる。ギリシア語の碑文は、「フィルアモンの息子、メラネオス。召使い、敬虔なる者」と読める。文中の「召使い」は、おそらく神の「召使い」であり、メラネオスは聖職者であった可能性が高い。この人物のステラがカタコンベの入口の上のニッチに配されていた理由については、今後検討が必要である。

②デメテリアのステラ（写真 26）

NS05-o00901、岩窟墓内部の北壁のニッチ、幅 32cm、高さ 60.5cm、厚さ 13.5cm。

このステラは、本来岩窟墓内部の北壁に穿たれたニッチに嵌め込まれたものであるが、そこから外れて落ちた状態で発見された（写真 23, 26）。矩形をしたステラである。ギリシア・ローマ風の神殿の中にデメテリアがブドウを持った姿で表されている。ブドウの下には犬が描かれている。デメテリアの衣装、ブドウ、犬、神殿の一部には彩色が施されている。浮き彫りは深く彫刻されており、人物像はギリシア・ローマ様式である。最下部にはギリシア文字が刻まれており、碑文は「デメテリア、メラネオス（の娘）、アンモニア（の孫娘）、讃えられし者、ご機嫌よう」と読める。

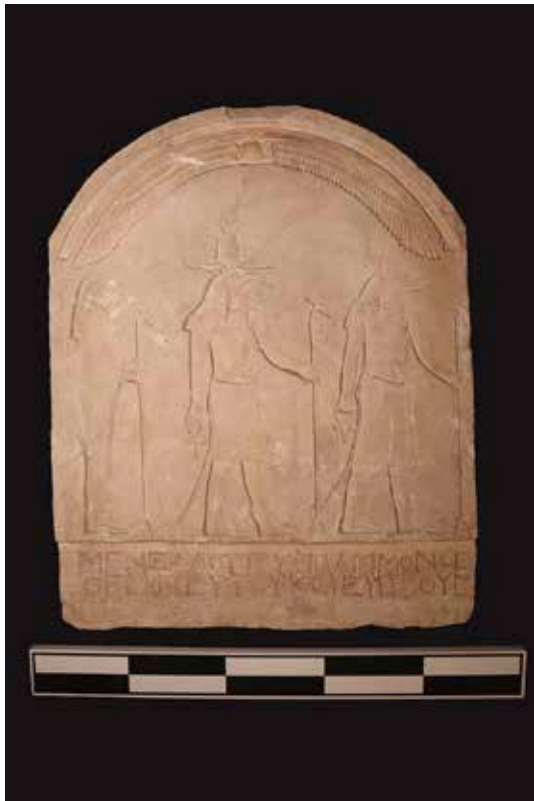


写真 25 岩窟墓入口上から原位置で発見された
メラネオスのステラ
Pl.25 Stela of Menelaus with the images of Anubis,
Thoth and Sokar found above the entrance of the catacomb



写真 26 岩窟墓内部の部屋からほぼ原位置で
発見されたデメテリアのステラ
Pl.26 Stela representing Demeteria and her dog
found inside the catacomb

(2) テラコッタ製像

今期調査では、9体のテラコッタ製像が発見された。テラコッタ製像は、型で作られ、内部は中空であり、しばしば背面に孔が開けられている。彩色されたテラコッタ製像が9体中8体で、前面に背景となる白色のスリップを塗布し、その上に黒、ピンク、緑などで細部を表現している。

今回報告するテラコッタ製像は、いずれも「女神裸像」に分類され（Sandri 2012: 638）、このようなテラコッタ製像は埋葬と強い関わりがあったと考えられている（Sandri 2012: 638; Fink 2008, 2009）。また、本遺跡出土資料のように、出土状況が明確な資料は稀有であり、テラコッタ製像の利用方法について新しい視点を提示しうると考えられる。

①イシス・アフロディーテ女神とハルポクラテスの彩色テラコッタ製像（写真 27）

NS05-o00900、岩窟墓内部、幅 18cm、高さ 57.5cm、厚さ 16.5cm。

最も大きいテラコッタ製像は、ほぼ完形で岩窟墓内部から発見されたイシス・アフロディーテ女神の像であ

る（写真 24, 27）。左手に丸底の碗、右手にリュトンを持つ。頭部には2重の花輪に、二枚羽根と太陽円盤に牡牛の角で表現された、王朝時代の伝統的なハトホル女神あるいはイシス女神の頭飾りの下にバシレイオンと呼ばれる頭飾りを冠っている⁹⁾。また、足元には、バシレイオンを冠った肌の黒いハルポクラテス（ホルス）を連れている。



写真 27 岩窟墓内部から発見されたイシス・アフロディーテ女神とハルポクラテス（ホルス）の彩色テラコッタ製像
Pl.27 Painted terracotta statue of Isis-Aphrodite with Harpocrates (Horus) found inside the catacomb

②イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.1）

NS05-o00824、岩窟墓入口上ステラ前、幅 7.1cm、高さ 42.2cm、厚さ 4.1cm。

③イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.2）

NS05-o00857、岩窟墓入口上ステラ前、幅 7.4cm、高さ 27.0cm、厚さ 4.8cm。

両者は、おそらく同じ型で作られたと考えられる。写真 28.1 は完形で、写真 28.2 は下部が欠けている。バシレイオンと呼ばれる頭飾りを身につけている。巻き髪で衣服を着用しており、衣服はキトンの上にフリンジの着いた布を巻きつけて胸部中央で結んでいる¹⁰⁾。衣服の類例はプトレマイオス朝時代からローマ支配期の像で見られる（Nagel 2015: 196–197）。

④イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像（写真 28.3）

NS05-o00823, o00825、岩窟墓入口上ステラ前、幅 9.2cm、高さ 40.8cm、厚さ 5.8cm。

同じくイシス・アフロディーテ女神がモチーフであり、頭にはバシレイオンを着用し、巻き髪で、衣服は着用していない。

⑤イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.4)

NS05-o00823, o00850, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 10.1cm、高さ 39.3cm、厚さ 5.6cm。

イシス・アフロディーテ女神がモチーフである。巻き髪で衣服を着用している。頭飾りにはカラトスと呼ばれる編み籠とコブラが表現されている。カラトスは紀元前3世紀～紀元後2世紀の例で見られる (BM1888,0601.110)。その他、類似した衣服と頭飾りをもつ類例はアンティノポリスから出土しており、紀元後2世紀～3世紀に年代づけられている (Dunand 1990: 136-137, no.360)。

⑥イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.5)

NS05-o00893, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 9.0cm、高さ 27.1cm、厚さ 6.2cm。

イシス・アフロディーテ女神がモチーフである。頭には花輪を冠り、その上にバシレイオンとカラトスが表現されている。類例はアンティノポリスから出土したルーヴル美術館所蔵の AF1290 が挙げられ、紀元後2世紀～3世紀に年代づけられている (Dunand 1990: pl.345)。

⑦イシス・アフロディーテ女神の彩色テラコッタ製像 (写真 28.6)

NS05-o00855, 岩窟墓入口上ステラ前、幅 10.3cm、高さ 25.8cm、厚さ 4.3cm。

顔が欠損しているが、おそらくイシス・アフロディーテ女神がモチーフと考えられる。頭にバシレイオンを付け、右手にはリュトン、左手にはヤシの葉を持つ。ヤシの葉は、ギリシア・ローマ世界において勝利の女神と関連づけられている (Hvalvik 2006: 432)。



写真 28 岩窟墓入口上のステラ前から発見された彩色テラコッタ製像群
Pl.28 Painted terracotta figurines found in front of the stela and the entrance gate of the catacomb

(3) ライオン横臥像

2体のライオン横臥像が岩窟墓入口前から原位置で発見された(写真21)。入口の南側と北側にそれぞれ向き合うように設置されており、墓の入口を守護する意味合いで設置されたと考えられる。

①石灰岩製ライオン横臥像(写真29)

NS05-o00904、岩窟墓入口前南側、幅58.0cm、高さ33.0cm、厚さ21.5cm。

類似したライオン横臥像は、ブルックリン博物館(37.1500E)の例がプトレマイオス朝からローマ支配期に年代づけられている。

②石灰岩製ライオン横臥像(写真30)

NS05-o00905、岩窟墓入口前北側、幅55.5cm、高さ35.0cm、厚さ22.0cm。

(4) ランプ

岩窟墓入口上のステラの前から完形のランプが4点発見された(写真19)。ランプの注口付近には、燃えた痕があり、実際に火を焚いていたと考えられる。型で上下を貼り合わせて作られている。層位の観察から、これらのランプは盗掘によってステラの前に置かれたと考えられる。

①ランプ(図4.1)

NS05-o00853、岩窟墓入口上ステラ前、幅11.6cm、高さ12.8cm、厚さ5.6cm。

表面には、白色スリップが施されており、また裏面には焼成前にマークが刻まれている。類似したランプは、紅海沿岸のクセイル・アル＝カディムに見られ、紀元後1世紀～2世紀に年代づけられる(Whitcomb and Johnson 1982: pl.60.n)。

②ランプ(図4.2)

NS05-o00854、岩窟墓入口上ステラ前、幅9.6cm、高さ16.4cm、厚さ6.9cm。

表面には、赤色スリップが施されている。

③ランプ(図4.3)

NS05-o00856、岩窟墓入口上ステラ前、幅9.0cm、高さ13.9cm、厚さ4.7cm。

④ランプ(図4.4)

NS05-o00863、岩窟墓入口上ステラ前、幅11.5cm、高さ14.8cm、厚さ5.2cm。

表面には、赤色スリップが施されている。類似したランプは、クセイル・アル＝カディムに見られ、紀元後1世紀～2世紀に年代づけられる(Whitcomb and Johnson 1979: pl.35.1; Whitcomb and Johnson 1982: pl.60.ee)。



写真 29 岩窟墓入口南側に置かれた
石灰岩製ライオン横臥像
Pl.29 Recumbent lion statue at the south of
entrance gate of the tomb



写真 30 岩窟墓入口北側に置かれた
石灰岩製ライオン横臥像
Pl.30 Recumbent lion statue at the north of
entrance gate of the tomb

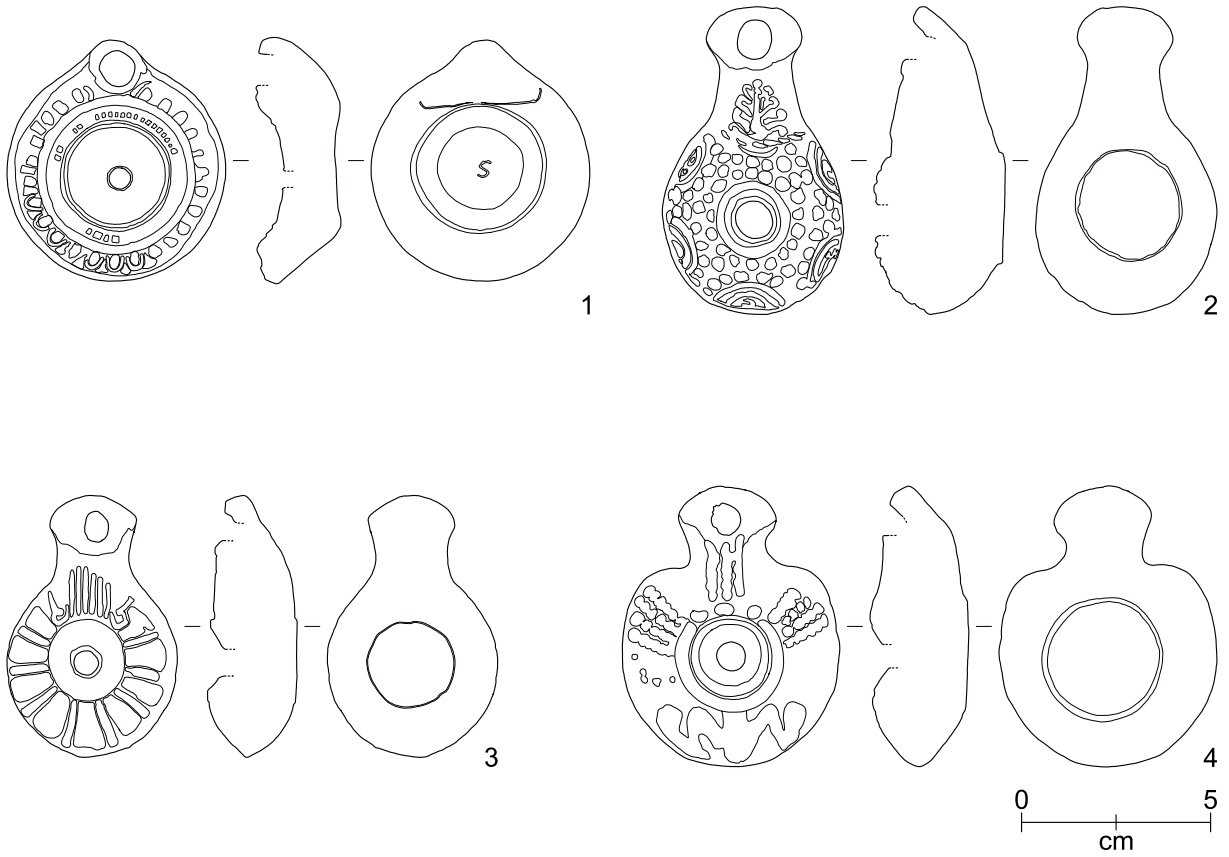


図4 ローマ支配期のランプ
Fig.4 Lamps dating to the Roman period

(6) 土器¹⁾

今期調査では、主に①岩盤東側、②通廊、③岩窟墓の3箇所から土器が出土している。土器群の整理はまだ完了していないが、以下にそれぞれの場所の土器の特徴について述べてみたい。

①岩盤東側

岩盤の東側の発掘調査を行ったところ、第4次調査で集中して出土した土器群の北側に、その続きが確認された。土器群は主にローマ支配期初期（紀元後1世紀頃）のアンフォラ（図5.1, 写真31）で構成されている。前述したように、土器群は通廊崩落部分を囲うように置かれていることから、この通廊に入るための土留めの役割を果たしていたと考えられる。出土状況から過去に置かれたままの状況を保っていると考えられる。これらの土器群がどこからもたらされたのかについては、今のところ不明である。可能性の一つとして考えられるのは、岩窟墓内部からであるが、内部の発掘前の状況を見ると、アンフォラなどの同じような土器は確認できない。この点については、今後、岩窟墓内部の発掘調査後に検討してみたい。

その他、岩盤東側からは、碗形土器（図5.2）、ミニチュア壺（図5.3, 写真32）、把手付壺形土器（図5.4, 写真33）が出土しており、アンフォラを含め、これらが岩盤東側出土土器の基本的な構成となっている。類例から同じくローマ支配期初期（紀元後1世紀頃）に年代づけられる。これらも同様に、岩窟墓内部の発掘後に、どこに由来するのかについて検討してみたい。

1) アンフォラ（図5.1, 写真31）

NS05-o00709、円環状の遺構内・黄色細砂層、口径11.7cm、最大径28.8cm、高さ93.2cm。

円環状の遺構中央から、逆さまの状態出土した（写真4）。ほぼ完形。類例は東部砂漠の採石場であるモンス・クラウディアヌスにあり、ハドリアヌス帝以降に年代づけられる（Tomber 2006: fig.1.57.12-859, 12-860; Tomber 2007: fig.3.2）。その他、デルタ地域のマレオタイデに類例がある（Empereur and Picon 1992: fig.3）。

2) 碗形土器（図5.2）

NS05-o00740、円環状の遺構内・黄色細砂層、口径15.7cm、高さ6.7cm。

内面と外面の一部に赤色スリップが施されている。ほぼ完形。類例は、東部砂漠の採石場であるモンス・ポルフィリテスにある（Tomber 2001: fig.6.13.4, 5）。

3) ミニチュア壺（図5.3, 写真32）

NS05-o00777、Area 4 黄色細砂層、最大径2.8cm、高さ8.8cm。

完形である。類例が、カルナクのアコリスの礼拝堂から出土しており、プトレマイオス朝時代からローマ支配期に年代づけられている（Lauffray 1995: figs.49.30, 53.2, 55.7, 44）。なお、アコリスの礼拝堂でも、テラコッタ製像、ランプと同じグリッドから出土しており（Lauffray 1995: fig.52.1, 67）、本遺跡と類似している。

4) 把手付壺形土器（図5.4, 写真33）

NS05-o00763、円環状の遺構周辺・黄色細砂層、口径5.9cm、最大径11.2cm、高さ16.1cm。

完形である。類例は、東部砂漠の採石場であるモンス・クラウディアヌスにある（Tomber 2006: fig.1.20.29-224）。

②通廊

瓶形土器1点が岩窟墓入口前の盗掘に関連する層から出土し(図5.5, 写真34)、また瓶形土器2点が、岩窟墓入口上のステラ前から出土した(図5.6, 7, 写真35)。層位などを検討すると、盗掘などの結果、ステラ前などに土器が置かれたと考えられる。その他、内部に炭化した植物が残った状態の碗形土器が出土しており(図5.9, 写真36)、これらは儀式に使用された可能性が考えられる。通廊の土器は、いずれも原位置ではないと考えられるが、どこに由来するのかについて、今後、岩窟墓内部の発掘調査を待って結論づけたい。

1) 瓶形土器(図5.5, 写真34)

NS05-o00864、岩窟墓入口上ステラ前、口径2.5cm、最大径4.2cm、高さ8.9cm。

完形である。口縁は、注口のように一部すぼまっており、口縁から頸部に欠けて、黒色スリップと赤色スリップが施されている。

2) 瓶形土器(図5.6)

NS05-o00861、岩窟墓入口前、最大径4.5cm、高さ(残存部)10.0cm。

頸部に赤色スリップが施されている。口縁部は欠けている。

3) 瓶形土器(図5.7, 写真35)

NS05-o00862、岩窟墓入口上ステラ前、口径3.0cm、最大径5.7cm、高さ15.0cm。

完形である。口縁から頸部にかけて、黒色スリップが施されている。

4) 碗形土器(図5.8)

NS05-o00902、通廊内部、口径14.8cm、高さ5.4cm。

完形である。内面と外面の一部にクリーム・スリップが施される。類例は、紅海沿岸のクセイル・アル＝カディムに見られる(Whitcomb and Johnson 1982: pl.23.j)。

5) 碗形土器(図5.9, 写真36)

NS05-o00903、岩窟墓入口前、口径14.7cm、高さ6.2cm。

完形である。内部に炭化した植物(おそらくマツボックリなど)が残るとともに、土器にも火を焚いた痕が見られる。類似した土器は、東部砂漠の採石場であるモンズ・クラウディアヌスにある(Tomber 2006: fig.1.11.40-129)。

③岩窟墓内部

壺形土器が部屋内部の入口近くの砂の上から出土した(図5.10, 写真37)。おそらく盗掘などの際に砂上に置かれたと考えられる。墓内部の木棺の中に、把手が付いているものの、同じ器形の土器があり、おそらくこの壺形土器も副葬品として納められていたと考えられる。

1) 壺形土器(図5.10, 写真37)

NS05-o00895、岩窟墓内部、口径11.0cm、最大径18.5cm、高さ18.3cm。

いわゆる“cooking pot”と呼ばれる器形である。完形。類例は、東部砂漠の採石場であるモンズ・ポルフィリテスにあり(Tomber 2001: fig.6.4.45, 50)、ローマ支配期初期(紀元後1世紀頃)に年代づけられる。

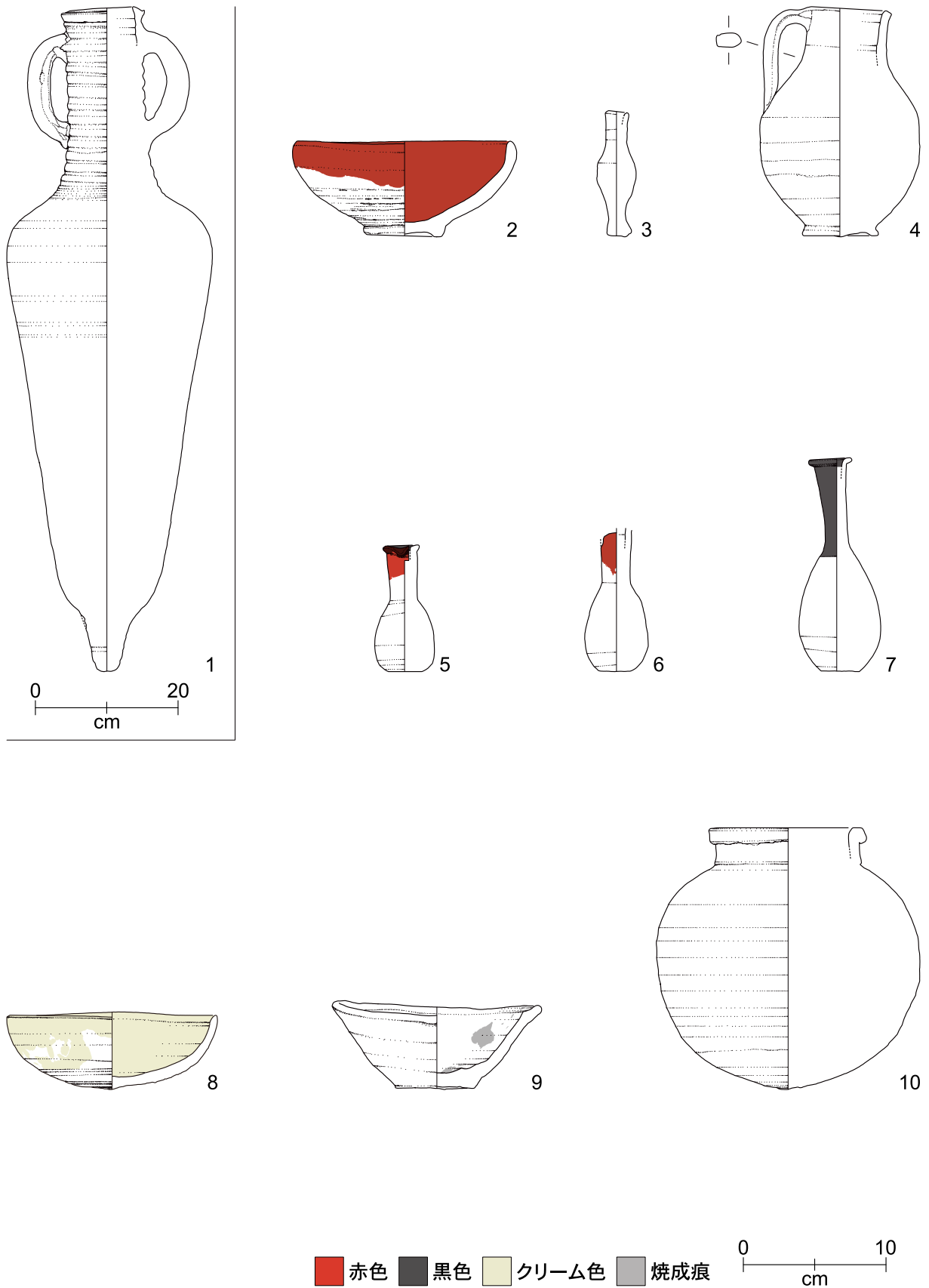


図5 ローマ支配期の土器
Fig.5 Roman pottery vessels



写真31 アンフォラ
Pl.31 Amphora



写真32 ミニチュア壺
Pl.32 Miniature jar



写真33 把手付壺形土器
Pl.33 Jug with one handle



写真34 瓶形土器
Pl.34 Bottle



写真35 瓶形土器
Pl.35 Bottle

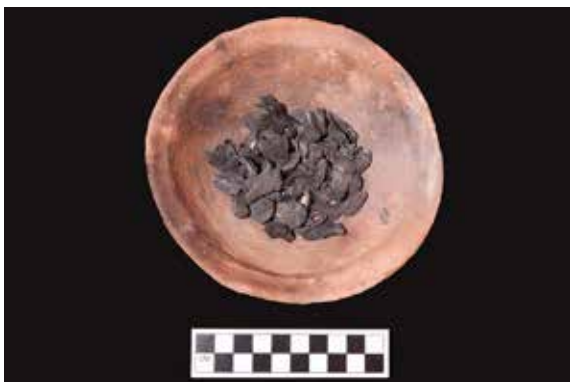


写真36 碗形土器
Pl.36 Cup containing burnt remains



写真37 壺形土器
Pl.37 Globular jar with rounded base

4. まとめ

第5次調査では、第4次調査においてその一部が確認されていた遺構について詳細を明らかにすることができた。すなわち、第4次調査において岩盤東側で発見された土器の集中は、その下にある通廊にアクセスするために築かれた土留めであることが明らかとなった。また、この通廊は、西側の岩窟墓（ローマ支配期のカタコンベ）に続いていることも確認された。エジプトにおけるローマ支配期のカタコンベについては、これまでアレクサンドリアでは知られていたものの、サッカラ遺跡あるいはナイル川流域では初の発見である。なお、岩窟墓内部に関しては、来期以降、本格的な発掘調査を行う計画である。今期の発掘調査によって、良好な考古学的情報を持ったローマ支配期の遺物を得ることができ、ローマ支配期のエジプトを知る上で重要な情報を得ることができた。今後、本調査区において更に発掘調査を進め、岩窟墓の全体像を把握していきたい。

謝辞

本調査は、科学研究費補助金基盤研究（B）「エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究」（代表：河合 望（金沢大学）、課題番号：19H01337）および金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際的研究の世界的拠点形成」（代表：河合 望）による研究の成果である。

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーレッド・アル＝アナニー閣下（博士）、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、外国調査隊管轄事務局長ナシュア・ガーベル博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、サッカラ査察局長サブリー・ファラグ氏、同ムハンマド・ユーセフ博士、サッカラ外国調査隊管轄事務局長サミール・ラマダン氏、主任査察官のマハムード・シャーバーン氏、サッカラ査察局修復士アマル・シェイカー博士、同ハッガーグ・ユーセフ氏、査察官ムハンマド・マハムード氏、マルワ・マハムード・アハマド氏を始めとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査時のもの）。カイロでは、早稲田大学エジプト学研究所カイロ・オフィスの吉村龍人氏、ムハンマド・アシュリー氏に考古省との渉外などで大変お世話になった。また、金沢大学人文学類フィールド文化学コース（考古学特別プログラム）4年の岡部 睦氏には、資料整理や図面の作成などでご協力いただいた。

ここに記して感謝の意を表する。

註

- 1) メンフィスの墓地であるサッカラの概要と研究の問題点については、以下を参照（河合 2017）。
- 2) 調査区は、テティ王のピラミッドの北東、アヌピエイオンの北側に位置し、旧イギリス調査隊の発掘宿舍と旧査察局の間にあたる。
- 3) 調査の参加者は以下の通りである。考古班：河合 望、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、岡部 睦、サブリー・ファラグ、ムハンマド・ユーセフ、アハマド・ジクリ、イスマイル・ムスタファ、建築班：柏木裕之、保存修復班：荻谷浩子、形質人類班：馬場悠男、坂上和弘、動物考古班：サリーマ・イクラム、現地渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 4) 本調査区は西側から東側に降る斜面になっており、斜面は真西に対して約 20 度振れている。従って、実際には南、北、東、西はそれぞれ南南東、北北西、東北東、西南東となる。ただし、方向が分かりにくくなるため、本稿ではそのまま南、北、東、西を用いることとする。
- 5) 布が巻かれた状態で発見された大人の単純埋葬（NS05-o00877）と子供の単純埋葬（NS05-o00766）に、金箔の付着が見られた。ローマ支配期では、頭、手、足に部分的に金の装飾を施す埋葬習慣があるとされている（Dunand and Roger 2006: 77）。金の装飾が施された単純埋葬は、これまでアンティノポリス、テーベ、カルガ・オアシスなどで確認されている（Dunand and Roger 2006: 77）。
- 6) 単純埋葬に関する形質人類学的調査については、以下を参照（坂上、馬場 2020; イクラム 2020）。
- 7) 層位などを見る限り、第5層はほぼ石灰岩で構成されており、第4層は日干レンガで構成されている。東側の石壁には、崩落した箇所が見られることから、例えば、まず東側の石壁が崩落し、その後、通廊の天井が崩落した可能性などが考えられる。

- 8) 例えば、再度、通廊を利用する際に、崩落した石灰岩や日干レンガを一度綺麗に片付けてから、通廊を利用することも考えられる。層位の観察では、一度の崩落しか分からないが、実際には何回か崩落していたのかもしれない。
- 9) 同じ姿勢のイシス・アフロディーテ女神とハルポクラテスのテラコッタ像の類例については、Dunand 1979: 182–183, pls.XXXI–XXXII を参照。
- 10) 衣服は、イシス・ドレスと呼ばれており、胸部中央の結び目は「イシスの結び目」を表すとされている (Nagel 2015: 196)。
- 11) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130–132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した (Aston 1998: 41–51)。

参考文献

Aston, D.A.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 “Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.

Dunand, F.

1979 *Études préliminaires aux religions orientales dans l'empire romain*, Leiden.

1990 *Catalogue des terres cuites gréco-romaines d'Égypte*, Paris.

Dunand, F and Roger, L.

2006 *Mummies and Death in Egypt*, New York.

Empereur, J.-Y. and Picon, M.

1992 “La reconnaissance des productions des ateliers céramiques: l'exemple de la Maréotide”, *Ateliers de Potiers et Productions Céramiques en Égypte, Cahiers de la Céramique Égyptienne* 3, pp.145–152.

Fink, M.

2008 “„Nackte Göttin“ und Anasyroméne. Zwei Motive — eine Deutung? (1. Teil)”, *Chronique d'Égypte* 83, pp.289–317.

2009 “„Nackte Göttin“ und Anasyroméne. Zwei Motive — eine Deutung? (2. Teil)”, *Chronique d'Égypte* 84, pp.335–347.

Hvalvik, R.

2006 “Christ Proclaiming His Law to The Apostles: The Traditio Legis-Motif in Early Christian Art and Literature”, in Fotopoulos, J. (ed.), *The New Testament and Early Christian Literature in Greco-Roman Context: Studies in Honor of David E. Aune*, Leiden, pp.403–435.

Lauffray, J.

1995 *La Chapelle d'Achôris à Karnak*, Paris.

Nagel, S.

2015 “The Goddess's New Clothes. Conceptualising an 'Eastern' Goddess for a 'Western' Audience”, in Flüchter, A. and Schöttli, J. (eds.), *The Dynamics of Transculturality: Concepts and Institutions in Motion*, Heidelberg, pp.187–218.

Nordström, H-Å and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Robins, G.

1994 *Proportion and Style in Ancient Egyptian Art*, London and New York.

Sandri, S.

2012 “Terracottas”, in Riggs, C. (ed.), *The Oxford handbook of Roman Egypt*, Oxford, pp.630–647.

Tomber, R.

2001 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *The Roman Imperial Quarries: Survey and Excavation at Mons Porphyrites 1994-1998, vol.I*, London.

2006 “The Pottery”, in Maxfield, V.A. and Peacock, D.P.S. (eds.), *Survey and Excavation, Mons Claudianus 1987-1993, Vol. III: Ceramic Vessels and Related Objects*, Cairo, pp.3–236.

2007 “Early Roman Egyptian Amphorae from the Eastern Desert of Egypt: a Chronological Sequence”, *Cahiers de la Céramique Égyptienne* 8, pp.525–536.

Whitcomb, D.S. and Johnson, J.H.

1979 *Quseir al-Qadim 1978: Preliminary Report*, Cairo.

1982 *Quseir al-Qadim 1980: Preliminary Report*, Malibu.

河合 望

2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査と研究」、常木 晃、西秋良宏、山内和也（編）、『西アジア考古学・最新研究の動向』季刊考古学第141号、雄山閣、pp.83-86.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花

2017a 「第1次北サッカー遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.127-144.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花

2017b 「第2次北サッカー遺跡踏査概報」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.145-181.

河合 望、三井 猛、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、梅田由子、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018a 「第3次北サッカー遺跡踏査概報：踏査・測量・探査報告」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.48-81.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美

2018b 「第3次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査」、『エジプト学研究』第24号、日本エジプト学会、pp.82-112.

河合 望、吉村作治、近藤二郎、柏木裕之、高橋寿光、米山由夏、石崎野々花、菅沼奏美、サリーマ イクラム

2020a 「第4次北サッカー遺跡調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.12-31.

坂上和弘、馬場悠男

2020 「北サッカー遺跡出土の単純埋葬遺体の形質人類学的調査」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.62-65.

サリーマ イクラム

2020 「2019年度北サッカー調査における動物遺存体とミイラに関する調査概報」、『エジプト学研究』第26号、日本エジプト学会、pp.66-73.

エジプト学研究 第26号

2020年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.26

Published date: 31 March 2020

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist